

例え雨で流せずとも

杜甫kuresu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは青年と、たった一体の奇妙な人形が小さな世界を変える物語。

青臭い理想論が泥臭い世界の不条理なんかに打ち勝つだけの、つまらない一幕。

P i x i vにもあります。

目次

1.	曇天	1
2.	夕立	14
3.	長雨	25
4.	雨降って	35

1. 曇天

俺はその日、父の横について歩く彼女に一目惚れした。

何とチープな開幕だろう、きつと半世紀前のB級映画だってこんな出だしじゃ監督は納得しない。恋の始まりなんてそんなものなんだろうか、あまり信じたくもない現実かもしれない。

心臓が高鳴るのがみつともなくて。父の言葉に返事できないのもみつともなくて。何だかそれでもどうでも良いやって、それすらもみつともなくて。

しかしあの出会いが運命だったとしても、俺がこれから刻む鼓動は

——きつと俺の意思だった。

だからこれは、俺が進む物語。運命じゃない、人々なんて御大層でもない。なにか歴史が動くとかも、多分無くて。

俺が進むだけのことを、沢山の人間が背中を押してくれる話になる。

「あの女の子、綺麗だった……………」

「またその話してるぜ、ミラ」

ミラと呼ばれた青年が溜息をつくとき、彼の周りに小さな子供が寄っ

てくる。ドラム缶の上、慣れた手付きで折った鶴を手渡した。

少女の一人はニコニコしながら受け取るなり、離れた子供のグループに見せに消えていく。ミラはぼんやりと彼女達の笑顔を頬杖を突いて眺めているばかり。

横に居た青年がニヤつく。毒にも薬にもならない顔つきの、意地悪な笑顔だつて穏やかん青年だ。

「親父さんの職場に見学に行つて、「部下の人形の子可愛い」だけ言つてる奴なんてお前ぐらいのもんだ。まあ確かにちよつと——
—可愛かつたけどな」

「だろぅさ………ハンジだつてそう言うと思つたさ」

ミラの溜息が深くなるなりハンジが笑う、珍しく引きずっている姿がハンジには喜ばしかつたらしい。

手先ばかりが器用なミラだが、彼はいつも物思いに耽るばかりであり同年代の輪というものに入りたがらない。全くコミュニケーションが取れないわけでもないのだが、しかしハンジの誘いを数度後に断るようになるいつも「なにか違う」と答える。

困つた親友だが、しかし心根の優しさを知るハンジはどうしてもほつとけ無い。いわゆる腐れ縁である。

そんなミラが以前向かつた職場体験というのは彼の父の居場所——
——グリフィンの軍事基地の一角だ。

近所だからとたまたま開かれたキャンペーンに応募しただけ。乗り気でなかつたミラも今ではこのざまだ。

「まあまあそんな物思いにふけつちやつてさ………せつかく親父さんが裕福だからつて学校だつて行けてんのに。お前は勿体ないよ、資源は有効活用しろつてば」

「学歴で入れる職場に何が有るか、俺には分からないよ。青臭いなんて分かつてるけど、でもお金や権力じゃ買えないものが俺が欲しい気がする」

学校にだつて入れないハンジからすれば意味不明だつた。ただそんな理想主義は、意外と嫌いじゃない。

そんな変わり者、というより勿体ない生活ばかりするミラには夢が

ない。夢がないなんて、21世紀も後半に差し掛かる今どきに笑うようなことではないがミラには深刻極まりない。

漠然と生きる日々がもう嫌だった。我儘なんて知っているが、何だかそれが納得できない。ヒーローにはなりたくないけど、自分の世界でも彼は主人公じゃない気分がしてならないのだ。

何時か横から出てきた誰かに主役を横取りされるんじゃないか。そんなアリもしないたらればに彼は時々悩むくらい。

「お金とか権力じゃ買えないものも腐るほど有るけど、買えるものも腐るほど有るんだぜ。まずはそっちを拾ってから考えなよ、お前は焦りすぎだ」

「ハンジは父親みたいなことばかりだ、変なやつ」

「変でいいよ、お前はもつと見てくればいいと俺は思う」

見てくればいいって何なのさ。

ミラは曇る空を見ながら景色の陳腐さに目を閉じた。

ハンジは困ったように頭を搔いて暫く唸った後、仕方なさげにミラの肩を叩く。

「……………しようがない、もう一回見てくるか？ あの人形」

「何で」

「お前が見たくて仕方ない顔をしてるからだよ」

そんな顔してるかよ、と言う彼の表情は少しだけ緩まっていた。

「では、改めて案内を務めさせていただきます。識別名はスプリングフィールド、短いお付き合いですね、よろしくお願ひしますね」
「よ、よろしくおねがいしまーす……………」
「お願ひします」

翡翠色の瞳にライトブラウンの髪、整った顔立ちには淑女らしい軍服がよく似合う。その絵画じみた姿にハンジは頬を緩ませていたが、

ミラは柔和ながら特にもたつく所作は見られない。

彼らの再見学はすぐに認可された、何しろ名前を出すなり、“基地の管理者”から既に返事が出されていたと告げられたのだ。

父親はもとより彼らが来ることを見越していたらしい、少しだけミラは舌打ちしていた。

早速と案内を始めたスプリングフィールドの最初の質問はミラに對して。ハンジは少し拗ねた。

「その、やはり指揮官業に」

「それは、ごめんなさい。違うんです」

言い切る前に否定すると、そのまま顔を逸らしてしまう。スプリングフィールドは申し訳無さそうに顔を逸らす。

彼は父親が嫌いだ。理由は様々だが、取り敢えずミラの中では「命を使い捨てる職」というものに抵抗があった。

別段人権団体に肩入れしようなどという趣味こそ無いものの、ミラにとっては人形は人間と同じものだ。世間では中々そうとは言われにくいことも多いけれど、少なくとも父親に手を引かれ、言葉をかわした人形達を道具と割り切れないのが彼の全てと言える。

スプリングフィールドだって彼は面識がある、何度も相手をしてもらった覚えも有る。勿論仕事の合間を縫って、ではあるが。

だからこそ“あの女の子”がミラは忘れられなかったのだから。

「……………誤解しないでくださいね、貴方のお父さんは決して——
——」

「言われなくとも。でも、まだ呑み込むには俺が若すぎるんだと思います」

ハンジも黙って背中を叩くことしか出来ない、彼の眼は確固とした残像を帯びている。

決して、全く分からないわけではない。

ただ、少し時間が足りていないだけ。それは皆分かっている。

スプリングフィールドはその後も自然な笑顔のまま、けれど歩幅の狭まるミラに合わせて案内をした。実はミラが父の職場に訪れたのは、前回で実に10年ぶりだった。

あの時は分からなかった様々な用語を今のミラは噛み砕ける、ハンジはミラの又聞き知識ながら理解することが出来る。

幸せなことだ。ミラには分からなくとも、ハンジには幸せと分かった。

「次の執務室は——案内するまでもないですけど。今は取り敢えず休憩しましょうか」

「じゃあ早速俺は座っちまおっかね〜」

幸せは、長続きなどしない。ハンジはそればかりは忘れていた。

ミラは、知らなかった。

ハンジが我先にと座り込んだテーブルが、壁からの衝撃で消し飛んでいく。

凄まじい煙に消えた後ろ姿がミラの脳裏に焼き付くのを止めるように、スプリングフィールドが両腕を背中に回して彼の体を衝撃から守る。

「——ハン、ジ……………?」

力なくミラが手を伸ばし、顔を覗かせようとするとスプリングフィールドが更に強く抱きしめ、そのまま明後日の方向へと走り出す。

鳴り響き出す警報、一瞬見えた夥しい深紅色の血液。もつれもつれにスプリングフィールドに連れられるミラが叫ぶ。

「おい、ハンジ！ 返事してくれ、ハンジってば！」

「走って！ 振り向いては駄目！」

後ろから聞こえる足音に引かれるようにミラが黒煙の向こうを見

ようと目を凝らすすが、代わりに出てきたのは紫色のバイザー頭の女達。

呆気にとられるなり更にスプリングフィールドが強く手を引くと、急に耳に手を当てて喋りだす。

「指揮官！ どうなっているんですか——」

何かを聞いたスプリングフィールドが顔を真っ青にする。

「——鉄血工造のAIに異常!? ならあの人形達はもしかして……………そんな」

「どういうことですかスプリングフィールドさん!? そんな事よりハンジが、ハンジが——ッ！」

話は噛み合わない。

「了解しました、すぐにそちらに誘導します！ 残った人形達で援護をお願いしますか!?!」

「はい、はい！ ルートは此方まで転送されました、ナビゲートをお願いします！」

そのまま空いていた手をミラの方に回すと、殆ど上半身を引っ張るような形でスプリングフィールドが更に加速する。

刹那に弾丸の嵐、ミラが目を見開いて叫ぶ。

「うわぁ——！」

「しっかり走って、貴方まで失うわけには行きません！」

もつれもつれの足で必死に走る。どんなランナーだって追いつけないスプリングフィールドの疾走も、命の危機に晒されたミラの足は自然と追いついていた。けれどそんな事に驚く暇は無い、彼はドンドンと逃げなくてはならなかった。

彼らが右へ、左へ、階段を登り、直線を走り、そんな事をする間にドンドンと銃を持ったIOPの人形達が逆方向へと消えていく。見たことの有る顔も居た、ミラは何も言うことが出来ないままスプリングフィールドに連れられていって、最後には顔を覆うことしか出来なくなっていく。

その速度にすら爆発は追いつく、銃声の後に迫ってくる何かは的確にミラ達の少し後ろを追っている。皆殺しにする気なのだろう、想像

するだけで彼の足が竦みそうになっていく。

「頑張つて、あのエレベーターで下に降りれば取り敢えずは安全ですから——！」

「は、はい……………」

直線に見えたエレベーターが開くと、そこがまるで無敵のシエルトーのように見えた。溢れる明かりにミラが僅かに安堵する。

もう涙すら浮かべていたミラの横を何度か弾丸が通り抜けたものの、何とかエレベーターまで辿り着く。

急いでスプリングフィールドが通信機をミラノポケットに入れながらエレベーターに叩きつけるように放り込むと、そのまま数字を押しして扉を閉じさせる——彼女は中に入っていない。

「えっ——スプリングフィールドさん、早く！」

嫌な予感に脂汗をかいたミラに、スプリングフィールドが煤だらけの顔で笑う。出来るだけ柔らかく。いつものように優しく、それでいて自然で、安心するような。

それが作り笑いだつたのだと、彼は気づいてしまう。

閉じていく扉に手を伸ばすけれど、叩きつけられた体は上手く動いてくれない。きつと彼女はそうすることも気づいていたのだ。

涙ばかりが視界をにじませる。

「……………お願いだから、貴方まで——！」

「ミラ君の前では、最後までかっこいいお姉さんが居たいんです」

「ごめんなさい、つらい思いをさせてしまうけど——」

「待って！」

扉が閉じた。扉を叩きながらミラが名前を呼んでも、もう彼女は答えない。

エレベーターがドンドンと下へと降りていく中、上で大きな爆発音。今までのものとは違う、理由もなく彼女が自決したのだとミラは胸を抑えながら悟ってしまった。

額をエレベーターにこすりつけて唇を噛みしめる。

「何で……………何で貴方まで、別に一緒に降りたって問題は——

——」

『エレベーターのケーブルを切られては困るからだ————ミラ』

通信から聞こえた声にミラがハツとする。苦しそうに呻く声が挟まれる。

ゆっくりとした動作で通信機を取り出して、絞り出すように尋ねた。

「……………また、貴方が殺したのか」

『否定はしない。死なせるにも、そんな決断をさせるにも——

——若すぎるのだ』

聞き慣れた、いやもう懐かしくて恨めしい父親の声。思わず感情の限り叫ぶ。

エレベーターは、とてもゆっくりと下っていくばかり。

「何で、何ですか！　そうやって貴方はすぐに諦める、大人は皆そうなんですか!?!　別にスプリングフィールドさんを殺さなくたって——

——」

『結局…………別の人形を使い捨てる』

「そこまでして俺を守る意味があるんですか!?!」

『無ければ！　俺とて、此処までするものか————けほっ、けほっ！』

何かを吐き出すような音。ミラの顔が真っ青になる。

「父さん、父さん!?!」

『……………真っ直ぐ、来い。まって————いる』

切れた通信、開く扉。薄暗い通路は肌寒い。

通信機をかなぐり捨てながら、ミラが歯噛みして走り出す。

「真っすぐ行けば良いんだよな、父さん……………ッ！」

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

「来たか……………」

相変わらず薄暗い部屋の奥、彼女と見慣れた男の顔が有った。息切れして目線のぐらつく彼でも分かる、紛れもなく父だった。

口から血を吐き、体中から血の牡丹を咲かせているのが臙脂色の制服越しに分かる。息もミラと同じくらい荒く、分かりたくなくてもその猶予が分かってしまうくらいだ。

並んでいる弾薬と、薄暗い奥にある何かには目もくれずに男に駆け寄る。

「何ですか。家にも戻らず、人形もろくずっぽ守れず、こんな体たらく！俺に一体何の用だっ言うんですか！」

「……………」

男の顔は見えない、思わず胸倉を掴む。

「息子だからって俺だけ助けて、何がPMCだ！貴方達は夢も無くした青年一人の命も守れやしなくせに！どの面を下げて！」

「やかましいー！」

思い切り跳ね除けられる。力はとても弱った男のものではなく、ミラは驚くより先に恐ろしかった。

そもそも、ミラが男に力づくで何かをされたことなど無かったの

だ。

部屋の奥で眼光が光る。

「お前を助けたのは息子だからなどではない！ 複数人を集めては場所が割れ、更にすぐ身近に人形を配置できていたのがお前だったからだ！」

「自惚れるなよ、俺とて息子だからと命の重さを見誤ったりなどせん！」

そう言いながら血を吐く男に、“彼女”が背中を擦る。

大きな白い花弁のシラユキゲシを添えた、ブロンドの髪。琥珀のようで冷たい瞳に、まるで喪服のように真っ黒な衣装。

そして手に持つのは銃、紛れもなく“彼女”だ。

男は“彼女”の肩を借り、ミラの方まで歩くと胸倉を掴む。

「俺がお前を選んだのは、もう一つ！」

「お前がそう言つてのける男であると、俺が何より知っているからだ！ そうでなければお前のような青二才、戦場で救う意味があるか！」

そう言つて胸ぐらを放り投げると、力なくミラが倒れ込んでしまふ。

あつけにとられる彼を背景に、男が“彼女”に何かを耳打ちしたかと思うと、“彼女”がしゃがみ込むなりミラの手を自分の胸元に押し当てる。

「えっ、ちょっと——」

「大人しくしておけ」

何か振動音と光が手元から溢れたかと思うと、万力のような手が突然に離される。

全力で手を抜こうとしていたミラはそのまま転がって壁に頭を打つ。

「っつー！」

「……………彼女の名前は、AUG。少々特殊な人形でな、もうお前の言うことしか聞かん」

突然の言葉にミラの眼が固まってしまふ。

「えっ?」

「……………いや、本音を言おう。すまない、俺はもう長くない——
——この人形をお前に託すまでが、精一杯だ……………けほっ、けほっ!」

血を吐き出す男の言葉にミラは手を振りながら質問攻めを始める。

「い、いきなりなんだって……………人形を、俺に? どうして? 何に使えって?」

今まで散々放任したくせに。

母が死んでも顔色一つか変えなかつたくせに。

人形一体も守れないくせに。

今更父親面か。面が厚いにもほどがないか。

そんな積もり積もった感情が色のない言葉になって消えていく。

男の返答は、まるで返事になっていない。

「お前が考えろ……………ソイツはお前の銃だ。人形であり、銃であり、お前を導く葬儀屋」

「きつとお前は、これからその力に思い悩む日が来るだろう。持たなければ良かつたと、知らなければ良かつたと俺を呪う日が来る」

「いいさ。俺を恨むが良い、父親など恨まれ役で結構だ、好きに恨め、墓もいらん。あいつの墓にだけ通ってやればいいさ、だがな」

「止まるな。お前には可能性が託された、お前にだって可能性がある。諦めるな、進め、例えどんな不条理を見ても、腐るな」

「俺は酷い命令をしている、だが止めないぞ」

「お前が見たものを、知ったものを、聞いたものを、触れたものを、全てソイツで示せ。もうお前は無力じゃない、あの日のように帰らなかった誰かに何も出来ないお前じゃないんだ」

「お前のしみったれた理想が俺には果てしなくくだらなく——
——そして眩しかった、だから」

「その力で、この世界を照らしてやってくれ。お前の思うように、お前の望むように、お前の願うように」

「そして出来れば………おまえ、も——し、あ………に——」

言葉は絶え、男は崩れ去った。

ミラの眼には涙はない。知っていたことだ、男が——い
や、父が長く生きれる性分でないなどと。

彼女が、AUGが彼を支えた優しい手付きが全てを答えている。

例え今まで、どれほど不器用で、どれほど無骨に世界を支えてきたとしても——男は、父はきつと苦悩してきた。

ミラの見た姿は、初めて彼のズレた歯車を戻した。“父”は確かに、戦い抜いていた。

母を失う以前から。

数多くの部下を失っても。

ならば言葉はいらない。

もう十分すぎる。

「………君は、AUGっていうんだね」

「はい。命令はありますが、指揮官さん」

指揮官か、と乾いた笑いが漏れる。

彼が何より忌避していたそれになってしまった今。どうしてだろう、それは言葉に尽くすほど不快ではなかった。ただ、その名前を呼ぶべき男が去った感触だけが虚しいだけ。

涙は流れた。けれど、もう涙だけではどうにもならない。

戦うしか無い。

「AUG。君の持つてる全力で、この戦況を逆転出来るかな」

「分かりませんが、指揮官さんが命令するならば。命を賭すのも已む無しかと」

已む無しか、随分と信用はなさそうだ。

ただ、彼はもう、命を背負う覚悟だけは決まっていた。

「分かった。頼むよAUG、死力を尽くして此処の敵を倒してくれ！

もう誰にも、大切な人に謝るような真似をさせるわけには行かない
！」

「了解」

部屋に蠢く無数の装甲兵達が、同時に動き出す音がした。

その出会いが運命だとしても。

その思いはきつと、彼だけのものに違いない。

2. 夕立

「装甲兵が勝手に……………!?!」

起き上がる装甲兵の群れ、ミラの表情が怖気だったものに変化していく。

ベージュ色の無機質に角張った体つき。彼の隣に立つ丸みを帯びたAUGの姿とは似ても似つかない、起き上がり、命令を待つように静止するその姿はまるで亡霊の整列。

AUGの左眼から人らしからぬ色の涙がゆっくりと流れる、ミラは思わず顔を触ろうとする。

「眼から血が——いや、何だこれ。血じゃない……………花の蜜みたいなの」

「お気遣いありがとうございます。この“機能”を使うには、まだ素体が不完全なだけです」

しろりと眼だけが横の彼を見ると、触れようとしていたのを思い出して反射的に手を引っ込める。

ミラの視線が右往左往していく。AUGはそれ自体には興味を示すわけでもなく、黙って空いた片手でその涙を掬い取る。

「ご、ごめん」

「……………何が、でしょうか?」

意味の分からない、という様子のAUGに困惑しながらもミラが口を滑らせる。

「いや、いきなり顔に触ろうとしたのは失礼かなって」

「失礼……………? 指揮官さんはおかしなことを仰るのですね」

まるで散歩でもするような軽い足取りで彼女が扉に向かうと、同時に装甲兵達が歩き出すなり扉を開く。握った銃はAUGよりずっと最新型で、その体軀は彼女よりずっと大柄。

幽霊のように音もなく歩き抜ける彼女を追うと、何だか名も知れぬ花のような残り香が鼻腔に刺さる。

小さく振り向いて、無表情に尋ねる。

「私達は人間に代わり、戦場を歩く道具に過ぎません。もしかしてア

ニミズムのお話でしょうか……?」

「え? あ、アニミズム? それは知らないけど、違う。君は道具じゃなくて——」

AUGは初めて、疑問らしき表情を見せた。

「指揮官さんは、道具以外の“何か”に危険を肩代わりさせている……?」

「そ、それは……」

でも道具なんかじゃなくて。エゴじゃないかと彼の脳裏で浮かぶ疑問に、言葉が口をついて出ることも無くなってしまった。

じゃあそうでないとするなら、人形が何だという話が彼の中を堂々巡りする。

人間に近いものだと言うなら、何故彼女達は戦場に出なくてはならない? どんな戦場だって人間の不始末だ、人間の過ちの後始末を人は戦場と読んできたのだから。

近くとも人間ではない。その後始末をする必要など有る訳がない。ならば道具と言いつけるか。道具と言いつけるものの喪失に、彼は涙出るような物持ちの良い青年だったろうか。

否。

では彼女達は、一体“何だ”?

AUGは改めて尋ねる。

「道具と仰られようと、私は貴方に逆らいませんよ?」

「違う、君のご機嫌取りなんて——いや、これからするかもしれないけど……今回は違う!」

必死に固まらない言葉を投げつけるミラに対して、AUGは本当に不思議そうだった。

自分を道具以上に定義できない彼女も、そんな荒んだ方程式しか組めなかった彼女も、ミラにはどうしようもなく辛い。人間のエゴの極みを喉元に突きつけられているような、嫌な脂汗が止まらなくなる。けれどそれに対して反論は出来ない。

今彼は間違いない“命令”したのだから。もう彼はそんな理想論を宣える立場に立てない。

齒噛みしつつ、靄を払うように手が空を振り払う。

「俺がそれを君に言うのは傲慢だけど、きつとそうじゃない。感じる心が有るのに、それを否定するのは間違ってる……………」

「なるほど。指揮官さん、それは確かに美しいお言葉かもしれませんが——」

遠くから聞こえる爆発音、思わずミラが振り向く。

「花を踏みしだく戦場で言うには、あまりに儂いのです」

装甲兵が走り出す。ミラは何も言い返せない。

何時か返す言葉を見つげなくてはならないのだな、そんな直感だけが体の芯を燃やすような錯覚に浸る。

「鉄血の一番槍、いや一番槍じゃねえな……………ともかくエクセキューショナーが来た！ 戦況はどうなってる！」

『そ、それが！ いきなり現れた人形と装甲兵の一団が——
おい、来るな、アアアアアアアア！』

おいおい最悪らしいな、と通信音量を下げながら舌打ちする。細められた赤い瞳はともこの虐殺の首謀者とは思えない輝く美しいものだった。

黒い髪に戦場らしからぬ肌色多い服装。右手の凄まじいアームと異様な形をしたブレードが特徴の鉄血ハイエンドモデルの一体、エクセキューショナー。どうやら切り込み隊長の任を何者からか得ているようだ。

順調と思われた奇襲に刺す暗雲。降り始めた雨も相まって気味が悪く、エクセキューショナーはすぐに別の部隊に繋げ直す。

「なんじやこりや、悲鳴が聞こえてんだが？ 状況を伝えやがれク

ソツタレ、オレはお前らの絶叫聞くために通信繋げてんじやねえんだよ。叫びたきや猿轡でもしてな！」

『じよ、状況としてはグリフィンらしき人形、及び装甲兵が次々ところらの部隊を圧倒しています！ 恐らくこのグリフィンの人形が全指揮権を持っていると見られ——』

報告の手前でエクセキューションナーが喋りだす。

「あーオツケーオツケー。ベリーグッドだやくたたず、そりやあさつきも聞いたんだよボケ。じゃあ数と位置は？」

『基地の地下方面、数は少なく見積もって数十！ 我々の火力では装甲兵が落としきれません！』

「それでいーんだよ、それで。じゃあ——出るか」

「お、おい待て！ 情報ぐらいは吐かせてくれてもバチは——」

「すみません。もうその言葉は五度程お聞かせいただきましたので、結構です」

四肢を撃たれ、倒れ込んでいた鉄血の胸にそのまま銃を乱射する。激しく乱れる銃痕とは裏腹に表情は相変わらず薄く、撃ち殺した鉄血など目もくれずに銃の状態を眺める。

「やはりコアは頭蓋ではなく胸。IOP製とそう変わらないのかしら、どうせこうなるのは分かっている筈なのに……」

眩く言葉はあまりに冷たい。すぐ傍で聞くミラは言葉一つ一つに心臓を突かれるような、言い知れない肝を冷やす感覚ばかりに襲われている。

悠長にAUGが構え直す間にも装甲兵は隊列を組んで前進を続けていた、匂うは常に火薬の残り香、AUGの無防備差に比べると火器

と堅強さに富む。

ゆつくりと追いついたAUGが端に残る虫の息の鉄血達にとどめを刺す。乱射するように手を振り回す所作、空いた片手は緩くミラを抱いている。併せて回る可憐な動作に似つかず弾丸は的確で、全て人形の胸だけを狙い撃っていた。

「装甲兵の皆さんは基礎ルーチンに徹底の二文字が不足していますわ。彼が取り寄せたのは初期ロットの方だったのでしようか……………」

「凄い……………あの装甲兵は全て君の指揮下なのか？」

AUGはあつけらかなとした様子で頷く。

「私が特殊、というのほそれだけのこと。最も、基礎的な動作をそれなりにオートマッチク化出来ていなければ私の思考リソースの関係上、そもそも盾にしか出来ませんが」

盾にしか出来ない。

その言葉を聞いた瞬間にミラの心の片隅にあの爆発音が響き出す。その笑顔が頭に焼き鏝で押されたように思考から剥がすことも出来なくなつて、それはさながら呪いの様相。

高揚で消えていた感覚が突然に舞い戻ってくる。押し寄せる情報の波は仄暗く、血の生暖かさが末端神経を撫で回す。

無くしたものを戻すことは出来ない。それは人形という凄まじいブレイクスルーを経ても変わらず、やはり“失われた事実”を覆すことなど不可能だったのだ。

「スプリングフィールドさん……………」

「スプリングフィールド……………ああ、彼女ですか。ロストしたと聞きましたか」

含蓄もなく告げたその一言が刺さる。誰がなんと言おうと、彼女がミラの道を繋げる犠牲になつたという認識は変わらない。

彼も前を向こうとはしている筈だ。ただ、やろうとして出来たならば人類はこんな所に来ることもなかった。

AUGが沈んだ彼の手を引きながら小首をかしげる。

「バックアップは取っているはずですから、復旧は可能ですよ」

それは彼女なりの励ましのつもりだったのだろうが、尚更にミラの肩が丸くなつていく。

予想外の展開にAUGは少しだけ困ったように眉をひそめる。

「それでも、俺の目の前から歩いていったあの人は戻らないよ」

「貴方との記録も恐らく残っているはず。一体その何が不満なのですか？」

「不満じゃない、そうじゃないけど………！」

それは間違っている。ミラのエゴの極まる所であり、そしてそれを容易に否定できる論理も存在しない。

「あの時あの瞬間に背中を押してくれた人形は、もう帰ってきたりしない………！ 今日の日を失ってしまったらもう、俺の知ってる彼女とは違う」

人の細胞は数ヶ月も有れば全て別物に入れ替わる。決して常に不変でいることは出来ないし、変化を受け入れることで針は刻まれてきた。

そうして重ねてきた時間が、全ての生き物の存在を過去と繋げている。誰とも言えない誰かが、“誰か”であるのは時間が証明しているからに過ぎない。

一時でもその時間を失ってしまったら、もう同じとは程遠い。

例え疑似体験しても、例えどれほど性格が一致していようと、彼女を繋ぎ止めている時間はもう消えてしまっている。

「……………人間は、とても難しいのですね。私にはよく分かりませんわ」

「でも、そんなよく分からない俺のために戦ってもらう事になる」

「それは構いません」

装甲兵の隙間を縫うように一体を撃ち抜くと、そのままマガジンをリリースしながら引いていた手でそのまま彼の体をぐいと寄せる。

息のかかる距離、冷たい手のひらよりもっと凍えるような、底の見えない表情が鮮明に映し出される。

「これから理解できます。貴方が私を手を手に馴染ませるように、きっと私も貴方の手に馴染むようになってみせますわ」

「それが人形という、道具」の最大の力なのですもの」

吐き出す言葉も冷たい鋼のようなのに、その双眸はいつそ苦しいほどに人間にしか見えなくて。

彼の鼓動は段々と、彼女への危機感を表すものへと変化していく。いつか必ず彼女には向き合う日がやってくる事が見えているのだ。

どうしようもなく人形は人間に似せられて、人間になるにはどうしようもなく人形で。

その瞳に灯る感情は言葉などまるで嘘っぱちのように淡く煌めいていた。

「おいおいお前ら、戦場のど真ん中でラブロマンスおっ始めてんじやねえよ——きつしよくわりい！」

飛び込む弾丸、AUGがミラを抱き抱えて崩れ落ちるように避けた。

途端に装甲兵がエクセキューションの周りを囲み始めるが、乱暴に振るわれたブレードがどんどんと装甲を引き裂いていく。まるでティツシユパーパーか何かのようだ。

割れた窓から横殴りの雨が入ってくる、AUGの肌にかかる水が何だか艶かしくてミラは目を逸らしてしまった。

「しよっぼい装甲だぜ、しかもトローい」

向けられた射線に弾かれるような、無軌道な動作ですり抜けるとメインカメラをもう片手の拳銃で撃ち抜いていく。

叩きつけられる銃は音もなく斬り去り、気づけば彼女は田の外側、振り向く装甲兵を一斉に切り払う。

「相性が悪すぎたな、どうするよロミジュリもどき」

ギロリと向いた赤い眼光がミラの思考をも撃ち抜く。

まるで狼がじつと此方を見ているような毛の逆立つ嫌な感触、自然とAUGの手を強く握り返すと、AUGは小さく力を込めた後に手を放す。

「アイツ、他のとは明らかに——」

「殲滅に手段は選びませんわ……………指揮官さん、下がってくださいりますか」

言葉を挟もうとした瞬間、またあの琥珀の瞳がじいとミラを見る。

何かを試しているような、暗に強制を強いるような、きつと何もありはしない瞳。けれど勘違いするには十分すぎるくらいに断固としたものがその視線には込められているような錯覚が彼の思索を常に憚ってならない。

仕方なく言われるままにミラは走って逃げていく。

「……………俺は邪魔、なんだな。存分にやってくれ！」

「了解、すぐに護衛の装甲兵が行きます」

「ちんたら敵の前でラブロマンス続けてんじゃねえよ！」

目を離れた際に漆黒が飛びかかる。大きく振りかぶられたブレードの行く先にミラはぶわりと汗が溢れ出た、AUGはまだ気づいていないのか微動だにしない。

凄まじい勢いで振り下ろされるそれはさながらギロチンのソレ、見るだけで血の匂いが鼻を突いて正常な判断力が削がれそうだ。

しかし叫ぶ前にAUGが一言だけ、小さく呟く。

「———少しお静かに」

刹那に彼女の右足が凄まじい勢いで振り上げられる、ブーツの漆黒が静かに捉えているのはエクセキューションナーの右手首———ブレードの持ち手だ。

速すぎる斬撃に人の肉体は反応できない。それと同じように誰も目を剥く暇も得られないまま、行為が執行されていく。

まずその足首が的確に持ち手を捉え。

次にAUGの身体が足先とは真逆からふわりと浮き上がる。

最後に空いた左足がエクセキューションナーの頬を的確に蹴り碎いた。

舞台的一幕のように始まった足技に壁へと叩きつけられ、鉄血製の身体が惨めに悲鳴に軋む。

「かはっ——！」

「それほどコアを無駄遣いなさりたいのでしたら仕方ありません、お望み通り刈り取って差し上げます」

重力もお構いなしに音もなく着地すると、ちらりとミラの方を見た。

走り抜けながら驚いた様子で見ていたのに、初めて小さく笑ってみせる。得意げなのか、安心させたいのか、意図はまるで掴みようがない。

雨の音ばかりが声を掻き消していく。

「AUG——！」

「恐れることもないでしょう？ 貴方の“道具”はこういうものなのですから」

機械のように振り向くと、無表情にAUGを乱射する。角に消えたミラにはもう彼女は見えない。

スキンの剥がれた金属の貌が歯を鳴らして迫る。

「てめえ、ナニモンだ！」

「さあ？ 私の素性に一体如何ほどの価値がありました？」

するりと避けるとそのまま乱射して明後日の方向に走っていく。頭に血が上ったエクセキューションナーは地面を砕きながら凄まじい勢いで加速し、後を追う。

「チツ、生け捕りかと思っただが辞めだ。お前はオレが此処で潰す——

——もう油断はしねえぞ、ゴミ人形！」

「やれるものなら」

更に加速、当然のようにAUGは逃げていく。

基地は彼女達にはあまりに狭い。曲がり角には壁を砕きながら手

をめり込ませて旋回し、通路で始まる銃撃戦は常に装甲兵が現れ、拳銃が打ち鳴らされ、まるで紙くずのように兵が捨てられる。

階段は殆ど一投足。AUGが悠長にマガジンを装填した瞬間、エクセキューションナーのクロウが迫る。

「ははっ、舐めてくれやがる」

「ではこうしましょう」

すぐさま手すりを掴むと勢いで身体を放り投げ、階段を一気に飛び降りる。乱射しながら逃避行は続く。

また曲がり角に階段。一層早くなった彼女の足が階段を上り、曲がり階段を上りきり、そして姿を消す。

エクセキューションナーの予感が何か嫌な感覚に悲鳴を上げたような気がしたが、しかし見失っては話にならない。アレは今潰すべき対象。

今が恐らく一番早く始末できる。手柄でもなければ、焦りでもない。

今壊さなければ立ちはだかるだろう、そんな自信だけが彼女の身体を突き動かす。

それがミスだったのだ。彼女は賢しいが、同時に予期せぬ事態を想定できなかった。

階段の上には確かにAUGは居た。銃を構え、雨に濡れ、そして彼女を見下ろしていた。

ただ一人ではない。

其処には何十もの部下だったはずのバイザーが見える。

「何——!?!」

全てが銃を一齐に構え、エクセキューションナーの胸元を一心に狙っているのが分かる。

クラッキング? いや馬鹿な、速すぎる。今彼女が登り切るのはよくて五秒、その間にクラッキングできるほど彼女達のプロトコルも単

純なはずがない。

では何故鉄血が彼女に銃を向ける。スローモーションのように止まっていく世界の中で彼女は考えた。

意味もなく。

果てしなく。

そして答えは一つだった。

歯噛みして睨んでやる。最後の抵抗というやつだ。

「テメエ、最初から此処に誘導してたんだな——ツ！」

「貴方のような兵士でさえ、戦場では道の花と変わりません」

「さようなら。次の素体でお会いできることを、心より願っておりますわ」

同時に降り注ぐ凄まじい銃弾の雨にエクセキューションナーは瞬く間にシステムダウンしていく。十や二十の弾丸で壊れずとも、百や二百の弾丸に耐え切るような設計はされていない。

見送る葬儀屋の表情はまるで雨風に心を攫われたように無関心。

雨が止んだ時には、何も動かぬ静寂だけが無慈悲に決着を指し示していた。

3. 長雨

「指揮官さん、一旦此処を離脱しましょう。増援が来るはずです」
「……………ああ。そうだね」

AUGが追いついた頃には敵の掃討は終わっていて、周りには雨粒の音ばかりが響く静かな通路が続いていた。

ミラは力なく壁にもたれこみながら項垂れている。AUGはすぐさましやがみ込んで彼の顔を覗く。

「どうかしましたか？ 体調が悪いのでしたら無理をせずに仰ってくださいれば」

「……………違うよ。君には多分、言っても分からない」
彼の脳裏には今までの記憶が延々と再生されていた。

親友が死に、人となりを知った人形が壊れ、実の父も息絶えた。どれもが呆気なく、そして彼を置いて、何よりも理不尽に死んでいった。不可抗力であることなど理屈では分かっている。彼が例え命を賭しても結果は変わらない、運命とは須らくそういうものだ。ハンジという青年はきつと何処かで死ぬだろうし、スプリングフィールドを救うほどの力など何処にもないし、父親の死など一体どうしろというのか。

けれど死を見た側は背負う。目の前で確かに、それまで当然に喋っていた誰かが“モノ”になる。

あの日と同じように。また、彼は何も出来ないまま喪った。

「これじゃあ母さんの時と一緒にやないか……………！ また、誰かの大切な人を俺は守れなかった……………！」

何も守らないように見えた父を責めた自分は、一体誰を守れたのか。

死体を見た。つい先程手続きに四苦八苦していた、若い女性。手袋越しには結婚指輪がはめられていて、きつと伴侶は彼女の無事を願うばかりだろう。

今日訪ねたばかりの技師も死んでいた。油まみれで笑つてのけた彼の顔をもう忘れられない。

誰かの“大切”が消えていくのを、見過ごせないほど見てしまった。

結局こんな力では、もう元には戻らない。

「またこうだ。俺はいつも通り過ぎてから、その人の大切さを思い出す。こんなに痛い程に忘れられないのに、痛くなるまでどうして……………」

何もしてやれなかった、等というのがチープなのは誰だって分かっている。

けれどその感情は決して否定できない。どうにもならないことだからと割り切れてしまうなら、きつと世界は誰も傷つかないまままで今日までやって来ただろう。

誰もそうなることなんて出来なかった。出来なくて、痛くて、後悔する胸を抑えながら歩いてくる。

失うものに何も感じずに居られる程、人は強くなれなかった。それはこの半世紀をもつてしても。

たった一人の青年に、そんな苦しみはどう立ち向かえといふのか。

「後悔は次に活かす他有りませんわ。貴方まで死んでしまつては、彼も立つ瀬が無いでしょう?」

「分かつてるよ、でももう全部投げ出したくなる! どうしてこんな事に……………」

AUGの瞳が、冷たく彼を射貫く。

「そうやってまた、私の大切なものまで奪うおつもりですか?」

「……………」

AUGがゆっくりと彼の顔を手で掬い上げると、涙に滲む眼に真っ直ぐとした視線を返す。

冷たく、機械のようだと彼は思ってしまう。血の通う何かの匂いがまるでしない、今しがた自分の言った言葉を飲み込んでしまいそうな。

そして、息を呑むほどにその顔は凍えて、美しい。

「貴方の仰る大切なもの、が私には分かりません」

「ですが本日、私は貴方の父親を失いました。なのにこうやってまた、

助けられるはずの貴方を置いて行けと命令するおつもりなのかと尋ねました」

少しだけ瞳が震えたような気がした。

「私には感情などと言った高尚なものはきつと無いでしょう。これはきつと、プログラムです。そう思うように植え付けられたに違いありません、ですが——」

「もう、手の届く貴方まで。私の傍を去って欲しくはありません……………」

何がプログラムだ、青年は責めた。

その顔はプログラム仕掛けのロボットを名乗る女がするには、少しばかり芸が細かすぎはしないだろうか。それではまるで、人は本気で愛憎まで作り物にできてしまったようではないか。そんな悲しい想像は彼には出来ないし、きつとそんな訳がない。

——俺の為にこんな顔をする人が居るのに、俺が諦めてどうするんだ。

次に青年は、数秒前の自分を責めた。

無力だから投げ出すのか。無駄だから終わらせるのか。悲しいから諦めるのか。

違うはずだ。それはもうしないと誓った、母を喪ったあの日から青年はそれだけはしないと決めている。逃げているだけでは何も変わらない、また同じ悲しみを誰かに押し付けるだけだろう。

例えこの足掻きが無意味でも。この悲しみだけは、背負って消えて

いかなくってはならない。

誰にもこんなもの、彼は譲り渡したくなかった。

涙さえ零れそうな僅かな表情に応えるように、頬に差し出された手を握り返す。

冷たい。冷たくて、しかし人間のよう柔らかい。

「……………ちよつと、弱音を吐きすぎた」

「無理難題でしたら、申し訳ありません」

薄く不安に揺れるのを繋ぎ止めるように、彼は手を更に強く握りしめた。きつと痛いくらい、痛いくらいに温かさが伝わるように。

「いや、君の感情は間違つてない。俺はそれを、守るために立ち上がるべきなんだ」

「我儘ばかり言つてごめん……………もう、大丈夫」

笑いそうな膝を奮い立たせて、彼が立ち上がった。

「俺はこれから、凄く無茶をする。出来るだけ手を貸してくれ」

「AUGがそんな顔をしないで良いように、俺も努力はするから」

ゆつくりと立ち上がる彼女の顔にはもう、何も映っていない。

けれどきつきよりずつと、そんな彼女から感情のようなものが感じられるような気がする。道具と自称する彼女の内に、それがどれ程の強さかなんてわからないけれど、確かに。

小さな感情の炎が揺れているような気がしてならない。

今しがた彼が分けてもらった炎は、きつと錯覚などではないのだから。

「私は貴方のための人形。望むならば、地の果てまでお供します」

道具にしては、ちよつと分かりやすすぎる。

彼は小さく笑った。

「ミ——指揮官、準備は出来ているぞ」

ストロベリーブロンドの髪が雫を吸って滑らかに光る。強まる雨の中に立つその姿は、相変わらず整然として更に鋭い。立ち居振る舞いからその堅強さが滲み出ていた。

名前をNTW—20、通称をダネル。RF人形の一体である。

ミラと以前から面識のある人形の一人で、昔「此処が二つ目」だと言っていたのが彼は印象的だ。

急を要する事態でも彼女の瞳は以前変わりなく、AUGとは違った落ち着きに近い雰囲気。彼の焦りをゆっくりと揉み解す。

AUGがするりと彼の前に出るとダネルと会話を始める。どうやら面識があるらしい。

「ダネルさん、車両は用意できていますか？」

「ああ。配給や弾薬も一応は詰めてある、お前が派手に暴れてくれたおかげだ」

いつものように淡々と会話が進められていく、並び立つ車両の名前も知らず、積み込まれる荷物が何ともしれない。ただ運び込んでいるのが大抵人形であることだけが彼にははつきり分かった。

きつとAUGの指示だ、直感めいた確信。

もうこの基地に人間など、居ないのだ。

悲しむこともない。流すべき涙は、今は雨が代わってくれている。

「えっと、ダネルさん」

「呼び捨てで構わない、もうあなたは指揮官だ」

指揮官。父が遺した名前。

少し言葉を支えさせて、もう一度。

「——ダネル」

「それで良い。どうした、指揮官」

「これからどうする予定かな」

予定、予定とダネルが囁みしめるように呟きながら顎に手を当てる。

「予定はない。ただ逃げる、勿論出来るだけ避難民を運んでだ」

「鉄血の方角は分かっている？」

「当たり前だ、私達の視力を舐めないでもらおうか。真逆に走る――

――」
そう言い切る前に誰かに呼ばれ、ダネルが奥の方へと歩いていった。飛ばす指示は暗号のようで、ミラの頭に上手く入ってこない。

結局言われるままにミラは車両の後ろにAUGと乗り込み、冷え込んだ身体を暖めるように毛布だけを寄越されて彼女の隣に座り込む形となる。

外ではまだ野次にも似た張り上げるようなダネルの声、きつとまだ慌ただしいのだ、場合によっては銃弾の音も聞こえる。

雨粒の天井にぶつかる音をBGMに、AUGにミラが話しかける。

「……………その、AUGはさ。父さんの事を、どういう人だと思ってるの」

「フアラン・リンクスですか」

「ああ。俺はあの人のことがもうよく分からない」

言葉尻は暗く、面持ちも暗い。

ミラが物心ついた少し後、母親が実験の失敗で死んでから父は随分と変わってしまった。

それまでよく笑っていた顔つきがとても険しくなった。基地に泊まり込みがちになるなり、ミラを置いたまま仕事に没頭するようになった。

いつも何かに追い立てられるような重い表情ばかりで、ミラの仔細をまるで気にも掛けず。それはもう、父親としては甚だ最悪だったとしか言いようがないだろう。

だからこそ、今日の一件で彼は見えなくなかった。今まで見ていた物は、恐らく現実とは全く異なるもの。

ミラ・リンクスが忌避した男は一体、何であったのか。

彼女なら、知っている気がしたのだ。

琥珀が揺蕩う。

「……………どういう人。端的に言えば、恐らく弱い方です」

「弱い？」

「はい。彼はいつも何かに唸り声を上げていました」

唸り声を上げる姿など、ミラは知らない。目を剥いた。

「作戦を見る度に犠牲者の数に唸り、私達の負傷を見る毎に耐えかねるように唸り、貴方の写真を見ては唸り、私が何かを言う度に唸っているような、そんな方です」

「文句が多いんじゃないの？」

「彼は………そういう方では有りませんでしたよ」

AUGが表情もなく縮こまって頭を擦る。その動作は何時にもまして子供のようで、何だか誰かに励まされているような姿にも感じた。

少しだけ綻ぶ表情が、父を支えたあの手付きをフラッシュバックさせていく。

「とても優しい方で、何度も私に仰るんですよ。『お前は確かに感じてるはずなのに、どうして認めてくれないんだ』と」

「おかしいでしょう？」

薄く笑ってミラの顔を見る彼女に、曇りのない眼差しが返された。

予想外の反応にAUGの肩が少しだけ力む。

「おかしくないよ。父さんはきつと俺よりもずっと近く、長く君を見て真剣に考えてたんだ」

「父さんは子供一人育てきれない駄目な父親かもしれないけど、人形一体の本質も見抜けないような間抜けな指揮官だったなんて——」

——AUG。君は本当に、父さんのことをそんな風に思った？」

思うものか、思えるはずが無い。その質問が無意味なのは、きつと彼だつて知っている。

ただ命令に従うだけだった彼女に、男は考える事を教えた。モノクロだった世界に、雫一粒でも色を垂らそうと足掻いた。矛盾を抱える苦しみに本気で怒って、机を叩き、手元のライト一つで夜を明かしたあの姿を見て、一体どんな人形が無能であったと笑うことが出来る。それは道具ですら無い、木偶だ。

見透かすように燃える鋼の瞳が今でも彼女を見ている気がしてならない。それは不快感などでは決して無く、男は死して尚青年を遺していった故に。

彼女に向けられるミラのひたむきな視線が、いつも彼女の論理的な思考回路にヒビを入れてしまう。

時折恐ろしく。

時折頼もしく。

時折思い出す。

その眼は、くだらない道具だった自分に“感情が有る”などと嘯いたあの大人のものと何ら変わらない。

もう去ってしまった筈だろうに、意味もなく重ねてしまう程にだ。そう感じる度に、無いはずの心臓が大きく脈打つ気がして落ち着かない。

薪もない伽藍堂の自分が、壊れるように燃え上がりそうになるような気がしてしまう。触つたらきつと、炎が消えてしまうだけ。

きつと彼はそれを知らない。自分がどれだけ彼女に手を伸ばそうとし、何度自分で抑えつけたか。

とても意地悪な質問だった。

その全てが紛れもなく、人形と向き合うべき指揮官の資質に他ならないだろう。

「思えませんよ。思えるものですか——貴方だって、分かってるでしょう」

眩しくて、思わず目を逸らす。言葉が熱を帯びてしまう。

「いじわるな人」

「それが答えだよ。君が信じるファラン・リンクスがそういうったんだ、君の持ち主だった男がね。それを君が違うと宣おうなんて、それこそ“道具”が何て出過ぎた口をつて話さ」

違う、今彼女がそう思えない理由はそれだけではない。

まだそれを言葉にすることは出来ない。彼女は知らないし、彼は気付かないし、時期はまだ遠いから。

そんな言葉の余韻に浸ってる内に、ダネル達の用意が済んだらしい。声と同時並行で続いていたネットワーク上の通信も同時に鳴り止み、車が歪な道に揺れ始める。

がたり、ごとりと何度も横に揺れる。時折肩が当たると、彼は少し

ぎこちなく謝って余所余所しく距離を取る。別に気にしてなど居ないのに。

むしろ彼の身体は温かくて、AUGはそれほど嫌いではない。

人間の温かさに触れると、何だか少しだけ心が柔らかくなるような気がする。気のせいなのかかもしれないけれど、そうやって近づいたつもりになることが嫌いなわけではない。

彼はとても温かくて、ついつい横に居たくなる。その不器用さを嫌う人も居るだろうけど、その姿をどうしてもAUGは切って捨てれない。初めてのことだった。

だからこそ。

また、ぶつかる。

「ごめん」

「平気です」

近づくのが怖いのは、他ならぬ彼のせいだった。

きつと、近づくほどに彼はAUGという存在を受け止めようと藻掻くようになる。こうやって否定しているのにまだ言い張って、あんな風に言葉を掛けてくる青年だ。

彼女がそうであると認めてしまったら、また背負ってしまう。

誰が見ても分かるほどに、今の彼は辛いはずなのに。道具の彼女が、また新しい重みになるなんて贅沢が過ぎることだ。

その役割は、担い手に便益を齎すことである筈だろうに。

雨粒の音が止まない。突然に止まる車に、雪崩れるように人が運び込まれてきた。

どうやら通信を聞くには新しい避難民のようだ。新しい来客は人形の定義からして喜ばしいはずなのだが、AUGは少しだけ

“邪魔だな”

と思ってしまう。理由は、分からない。

誰も居なかった席が懐かしくて仕方なかった。

走り出す頃、またこつりと彼の頭がAUGの肩に当たる。今度は何を言うのだろうか、図らずも期待じみた気持ちを視線に込めて、首だけで振り向く。

今度は返事がなくて、思わず彼女が首だけで彼の横顔を覗く。

「……………寝てしまいましたか」

張り詰めていた表情が嘘のように穏やかな寝息を立てて眠る彼の頭を、片手でそつと撫でてみる。

どうしてそんな事をしようと思ったのかは彼女自身にも分からな
い。ただ、肩を伝う彼の体温は今までよりもずっと熱くて、暫くその
ままで居たいということだけがはつきりしていた。

4. 雨降って

“おはようございます、ミラ君”

何時のことだろうか、彼が名前を呼ばれたのは。

10年前、彼はよく基地に遊びに来る変わり者の青年だった。大人は人形に職を奪われて困窮し、良くない偏見ばかりを子供に押し付けるせいだ。人形というのは、その実関わりない人間たちの非難ばかりを浴びてばかりなものだ。

指揮官の息子だった彼にそれはない。いつも遊んでくれる優しい女性というのが彼の印象に残って止まないだろう。

いつものように銃を見せてもらって、弾を見せてもらって、そんなものではしゃいで。

幕が下りるように突然辺りが暗くなる。

取り残される彼が走り回ると、直方体に囲まれてることが分かる。

真つ暗闇、ドンドンと悲鳴が聞こえてくる。

最初は見も知らぬ誰かの悲鳴。段々と、段々と知っている声が聞こえてくる。

彼が叫んでも声は誰にも届かない。凄まじい爆発音に、射撃音。音ばかりが外で鳴り響くのが聞こえてくるけれど、彼の叫びは誰にも届かない。叩く壁はびくともしない。

「もう辞めてくれ……………」

起きたばかりの声は小さく、まるで声を絞り出すようだった。

周りには寝静まった多くの人形達、恐らく合間を縫って配置を組み直したのだろう。彼女達だって休息は必要になる、そこは何も人間と

変わらない。

雨の音は止んでいて、僅かに外から入ってくる光は夜のもの。まだ車は揺れているらしく、それと妙に温かい。

——そう、何だか不自然に体が温かい。

誰かに抱きつかれているような。

「……………!?!」

いや、それが比喻で済まなかったのは青年の不幸なのだろうか。

言葉通りAUGに抱きつかれていた。何時の間に横になってしまっていたのだろうか、普通に迷惑な気もするし何より彼の気が気ではない。

突然降ってくる怒涛の情報量に彼が完全に固まってしまおう、思考も何だか明後日の方向に逃げようとしている。

そもそもミラ・リンクスという青年が異性に関わる機会は、精々ドラム缶の上で鶴を折る時ぐらいのもの。何であれば、彼の半径5mに立つと限定すれば年下の小さな子供に限られてくるように生活を送ってきた。

フリーズしたり藻掻いたり。悲しいのは彼の腕力では脇に回された手が全く動かないことだろう、睡眠中だと言うのにどういう仕組みなのかさっぱりである。

「外れない……………何だこの力……………ッ!?!」

動けば動くほどに否応なく感触が分かって焦りが加速する。

彼女の印象は恐ろしいほど冷たく、実際手も冷たかった経緯は有ったが幾ら言っても擬似生命だ。絡められた足も意外なほど温かいし、背中の感触は言わずもがな。ミラはなけなしの誠実さでその部分だけは深く考えないことにしている。

結局ミラがジタバタしている内に、ふと振り向くと眼が開いた彼女と鉢合わせになる。

「……………どうしましたか?」

静かに尋ねられる、しかも昼と変わらない真顔だ。ミラは大声を出しそうになる所だったが声を何とか押し殺す。

「どうかしてるよ、何で俺に抱きついてるんだ」

「寝る時は何かに抱きつかないと寝れないので。近場の指揮官さんが適任でした」

頭をとんかちで打たれたような気分には彼が面食らう。

偶々近くに居るからこんな状態になっていたらしい、別段彼がどうという訳でもなく。AUGにとつて彼は“近場の抱きついて問題ないもの”だったと来る、一体ショックを受ければ良いのか信頼と見れば良いのかすら彼にはさっぱりだ。

ただ一つ言えるのは、別段彼がどうという訳でもなさそうなことだった。残念ながらミラも真つ当な青年なので、もうこれに関しては単純に傷ついた。

意識されずとも配慮はされたい。無関心が誰だつて一番心に残つてしまう。

「……………」

「それで、何か用事ですか？」

「ちよつと……………外で風に当たってくる……………」

すぐに外れた腕に、いよいよ敗北感が滲んでくる。惨めだ。

逃げるように車両を後にした。

「起きたのか」

「ええ、ちよつと。見張りを変わってます」

無理もないか、とダネルが彼の横に腰掛ける。車両の上は冷え込む夜には良い場所ではなかったが、離れるわけにも行かない。彼の逃げ場は何処にも無かった。

——まあ、彼に任せるくらいなら自分でやったほうが人形は効率が良い。気を遣ってもらっていることに変わりはない。良かったりもするのだが。

雨上がり、湿った地面に比べて月明かりは淡く強い。光を吸ったダ

ネルの髪に、ミラは昔写真で見た“枝垂れ桜”を思い出した。冷え込んだ風に靡く姿は記憶にあるあの桜にそっくりだ。

ぼんやりと眺めているのに気付かれる。

「……………髪は傷んでいるかもしれない。そうジロジロ見ないでくれるか」

「いや、綺麗だと思うよ。昔から言ってはなかったけど」

飾りげもなく答えた言葉に、ダネルが髪をかきむしって目を逸らす。

「何処で覚えてくる」

「えっ?」

「お前の親父さんにそっくりだ。気分は悪くないが、銃も言葉も無闇矢鱈に乱射するものじゃない」

「AUGは乱射してたような」

「その話はやめろ、アイツは例外だ」

アレはやっぱ例外だったんだな、とミラは納得してしまう。というより戦場の常がアレなのも困る。

暫くダネルの大真面目な物言いが面白かったのか笑いながら辺りを見回していたが、並走する車両の人形を何度か流し見して、繰り返す毎に顔を少しづつ陰らせていく。

彼女は何も言葉をかけようとはしなかった。それが慰めにだってなりはしないことを知っているからだ、淀みを流さずに楽になろうというのはとても傲慢で、過信も甚だしい。

そんなに強くなれたなら誰だって苦しまない。

「言える内が華だよ。言葉も届かなくなったら、もうどうしようもないじゃないか……………明日にだって、居なくなれるのに」

「スプリングフィールドのことか」

彼が見つけたのはスプリングフィールドの姿だった。

所詮は人形などというものでもないが、バックアップが有るというAUGの言葉は嘘ではない。当然のように彼女はミラを知っているし、ミラも彼女を知っている。

何も変わらない。今日という一日を、変化を受け取れなかった人形

だ。それを人は「変わらない」ではなく、きつと「変われなかった」と表現するだろう。

ゆっくりと頷く。

「分かっています、こういうのって無駄なんです。無くしたものは受け入れて前に進まない、また無くすだけ。知ってるんですよ、俺だつて——そんなの嫌ってほど知っています」

齒のかち合う音。

「でも俺、強くなれませんよ………！ いきなり友達が死んで、人形を犠牲にして、父さんに託されて先立たれて」

「強くなりたいですよ………っ。でも、皆に俺は応えられない！」
誰だつてぶつかつて強くなる。転んでも起き上がるから、次は転ばなくなる。

でも彼は倒れたまま歩けと言われっぱなしだ。まだ立ち上がれるほど痛みが引いてないのに、傷を負ったまま歩いていくしか無い。

辛いのは知っている。知っているから、背中を押せる。

分かつてると言い張るから、平然と次を求める。

土台無理な筈なのに。人の痛みにも他人はこんなにも無力なのに。

それを“分かる”等とダネルは言えない、彼女がかつてそうであつたからだ。

黙つて塞ぎ込む頭を撫でることしか出来ない。

「………強くなれなんて言葉は無責任だ。でも、私達は人形で、お前が指揮官になつてしまった。強くなつては指揮官が務まる訳がない」
「お前の苦悩は分からない。ただ壁を乗り越えるために、一つだけ大事なことを教えてやる」

そんな言葉も酷だというのも知っている。

だが、傷痍兵を捨て置くのは戦場だけで十分だ。誹りも恨みも甘んじて受けてでも、彼女にだつて伝えたい言葉は有る。

時として残酷な言葉も、例えそれが呪いになつても、誰かを歩かせる理由になつてくれるならば。

人形がするには独善的で、人間臭くて、悲しいくらいにその場しのぎ。

「お前の親父さんも、スプリングフィールドも、お前に強くなれと言え
るような性分ではない」

「死んだ者のために生きるのではなく、死んだものに恥じない生き方
をしろ」

ダネルの瞳が、川に落ちた桜のように淡く揺らぐ。

その丸くなった背中が昔の自分に繋がってしまったのだろう。違
うことは知っているし、理解してはいけないものだが近いと言っ
てしまえばどうしようもなく近いはずなのだ。

「戦場では多くの人形が呆気なく死んでいく。お前の感情を否定する
気など無いが、時には今日の比でない程消えてしまう日もある」

「バックアップの取れる私達の命の重みがどれ程有るのかは分からな
い。下手をすれば家電製品と何ら変わらないのかもしれない」

ただ。

「忘れるのは難しい。忘れないのなら、忘れない為に私達は、踏み台に
した命に後悔しない歩き方というのを心得るしかない」

「分かるか、ミラ・リンクス。お前は誰かのせいで悩むんじゃない――

――他ならぬ自分と戦い続けるんだ」

「呑まれるな。少なくとも指揮官はそれを望まない、保証してやる」

乱暴な手付きに感じる、僅かな薬指の違和感。

彼女がグローブを取った姿は見たことがなかったが、その感触は小
さな頃に覚えがある。

「……………指輪？」

気づくとダネルは咄嗟に右手を放す。

そう、それは父親の乱暴な指の感触によく似ていた。あんまり手を
押し付けるから指輪が痛いのもでそっくりで、変な感じだった。

「おっと。お前は変なところで勘がいい、あまり言うなよ」

「……………父さん、浮気は流石に」

「違う」

不名誉のあまりにチョップが入る。

「前の基地の指揮官だ……………しまったな、あまり気付かれないようにし
てきたんだが」

「本当に仲、良かったんだ」

まあな、とニヤリとする。

「もう死んだが」

「——ゴメン」

さらりと云つてのけた言葉にミラがまた縮こまってしまふ。ダネルはまたミスをした、と少しだけ自分を責めた。

彼にとつて誰かの死というのは、まだ“そういうもの”らしい。

「こちらこそすまなかつた。つい、戦場に居ると重みを忘れてしまふ」「押し付けたのは俺達だ、貴方がそうなる程に戦わせた方にだつて責任はあるはずだよ」

それは此方には返しにくい言葉だがな、と自嘲気味に笑う。

ミラは昔から似ている。こんな無骨な女に似合わない、立派な物を渡してきたアレに。忘れてやろうにもメモリに刻み過ぎで、消してしまふ労力が無駄にすら感じてしまふ。

アレも瞳が子供のように真っ直ぐで、一度言つたらやり通すが基本の変なやつだつた。本当は弱いくせに、意地を張ることだけは一人前で、何だかんだと人形も信用されるのも少し似ている。

「アイツも似たようなことを言つたよ。割り切ればいいのに」

「それをしたら、父さんとの約束が守れない。俺は止まる訳には行かないんだ」

——また彼も、おかしな約束をさせてしまったものだ。

そう思つてはみたが、ダネルの口元は笑っていた。ミラは反面、手をギュツと握りしめる。

「AUGの手にはまだ外骨格がついてた………外せるまで、俺は止まろうとは思えないよ」

「それは結構。お前が望むままに振るまえ、戦いは私達が何とかしてやるさ」

ただし夜更しは程々にすることだ。

そう言いながらダネルが彼を車の中に無理やり押し込んだ。

「このガキが指揮官だと?」

「そうですが、何か問題でも」

AUGが銃を持った時のそのような鋭い目つきで返す、朝から車は止められて男達が立ち並んでいた。

何でも夜明け早々ミラの指揮権に関して揉め事が起きていたらしい。理由は予想のつく簡単なもので、「こんなガキに避難民の命を任せろというのか」というもの。

どうやらそれもただの一般市民、とは行かない人間達の言い分らしく、ミラは引つ張り出されるように屈強な彼らの前に置物にさせられていた。

「良いか、こっちは命が懸かっている! こんな銃を持つだけで息切れしそうな奴にはいそうですね。かかって全権委ねられるほど安い命じゃねえんだよ!」

「人の命は私達のように軽いものではありませんわ。勿論承知しております」

「ああそうだよ、バックアップは効かないからな!」

ミラが歯噛みして男を睨む。

人形がバックアップを取れることには何の疑いようもないが、だからそれが軽い命という言葉に繋がられて良いことはない。少なくとも彼にとってはそう見える。

殺意でも籠もりそうな恨みがましい視線、流石に男も気づいたのかミラに突っかかる。

「おい何だよ、言いたげだな——」

男の手が伸びる瞬間、AUGが凄まじい力でその右手を捻り上げるとそのまま地面に男を叩きつける。その動作はたった片手のもので、どきりと落ちた男が未だに呻き声を上げる。

「くそっ、いつてえ！」

「すみません。ご不満があらうとなかろうと現在の指揮はミラ・リンクス、司令塔に害をなすなら——人形とは言え、相応の対応は可能ですので」

「何が相応の対応だ！」

明らかに悪くなる空気、人形も人形で一步も引く様子がない。

周りで見ているだけの避難民も襲撃からこれまで上手く眠れていないのも有って、揉めているのはあまりよろしい目では見られていない。当然だ、揉め事を起こしている暇がないのは大抵の人間が分かっている。

「じゃあ貴方が、人形の全指揮を執ってくれるんですか」

「……………何？」

ミラが前に出ると、AUGに手を離すように軽く促す。彼にはちよつとだけ表情が不服そうに見えた気がしたが、実際の所表情が薄くてまるで実態が掴めてこない。

渋々と言った様子で彼女が手を離すと、急いで起き上がった男がミラを睨みつける、後ろで見ているばかりだった男もぞろぞろと集まってきた。

「貴方が彼女達に指示をして、俺よりと言わずとも皆を守れるのかって聞いたんですよー！」

「お前みたいな素人よりはマシだ、俺達は軍人崩れだからな！」

AUGが突つかかろうとするのに

「絶対に人形は手を出さないでくれ。AUGも、こんな事で力になってくれなくていい」

とミラが振り向かず、手で制する。命令には、逆らえない。

「これは俺とこの人達の問題だから」

明らかに体格も違う男相手にミラは全く引こうともしなければ、拳を握りしめる様子もない。瞳こそ真つ直ぐしたものだが、全く害意がないのは見れば分かる。

「はつきり言いますが、貴方達のせいで大半の人が困っているんです。俺が適任かどうかで揉めるまでもなく、此処で一々文句をつけるだけの方がよっぽど時間の無駄ですよ。鉄血が何処まで来てるかだって分かったもんじゃやない」

「はつきり言つて、こんな事をしてる貴方達のほうが信用ならないじゃないですか！」

ミラが言い切るのと同時に男が手を振りかぶる。

「言わせておけば戦場も知らねえ子供が偉そうに！」

彼の何倍はあろうかという太腕が顔に突き刺さる。言うまでもなくそれを止める反射神経も腕力もないミラは呆気なく殴られて吹っ飛ばされそうになる、鼻から血だつて出た。

ただ、その男の手をしっかりと握りしめる。殴られてフラフラするのもやつとのことで抑えて、尚その瞳が鋭く男の顔を睨み返す。

「そうですよ………知りませんよ。そう言うなら教えて下さい」

「今は指揮権が誰なのかだとか、俺が戦場を知っているかどうかだとか、そんなくだらない話には全然興味がありません！　そう思うなら手を貸してください、俺が非力なのは最初から否定する気が無いんですから！」

予想外の行動に男がたじろぐが、彼は一步下がるのに合わせて詰め寄っていく。気迫などというには弱々しいものだったが、まるでどちらが押し負けているのか見ても見当がつかない。

明らかにミラの方が体格でも、人数でも押し負けているというのに。

男が再び口を挟もうとするのを抑えるように捲し立てる。

「貴方達も家族を失ったかもしれない、友人が居なくなつたかもしれない。俺を責めたい気持ちまで否定する気はありません」

「ただ、もうそんな人が出ないように協力をしてください。指揮権の譲渡をコンソール無しで済ませるのは手続きがかなり複雑で多い——それだけで指揮系統に長時間の混乱が出てしまうんです。貴方達はそれも知らなかつたはずですよ」

男は何も返せない。

「今日の前に居る人達が言いたいことも分かります、一理もあるかもしれません。だからこそ、それでも今は俺を信じてください」

「貴方達のエゴで争つてられるほど、猶予はないんです………ッ！」

「昨日も散々言いましたのに………本当にそんな事を言いだしたのですか」

声がるなり、男達がビクリと背筋を伸ばし始めた。声は後ろの方、彼らの更に向こうから聞こえてくる。

柔らかい女の声だ。声色こそ年を悟らせない落ち着いたものだが、声質自体は至って若い。何であればミラとそこまでの差は無いと感じられる程度だ。

男達が整つた所作で道を開ける。開けた道はさながらレッドカーペット、安上がりな貴族舞台に少女がゆっくりと歩いてくる。

「全く、自分より一回りも離れた青年に正論をぶつけられて恥ずかしくないのかしら——恥というものを知りなさい。一部の声が組織の声、貴方達のせいだ”Hunder t”の品位も、関係

のない命も失われてしまいます」

長いピンに目立つ黒のサイハイブーツ。短めのベスト・ワンピースの藍色が眩しく、止められた金釦が冷たい風格を醸し出す。

白——正確には透明だろうか。色素の抜けた長い髪に、赤い瞳。しかし左眼は眼帯で隠しきれぬ大きな傷跡が残っており、よく見れば手先やちらりと見える足にもその痕があった。

被る帽子は軍帽だろうか、真っ黒でその雰囲気によく似合っている。

駄目押しと言わんばかりに黒いファーコートを羽織る姿は、さながら鴉。

「わたくしに畏まる暇が有ったら彼に謝りなさい。全くもって正論、今そこは論点にする意味がないわ」

そう言いながら彼女がミラの前に立つと、帽子を胸の前に当てて深々と頭を下げる。

「わたくしの部下のぐ無礼、謹んでお詫び申し上げます。普段は此処まで酷い方達ではないのですが………どう言いますようか、如何せん浅慮が過ぎる時が有るもので」

妙齢の少女に謝られたはずだったが、何故かミラまで畏まってしまふ。

恐らくその所作が堂々としていてまた誠意のこもっていたものだったからだろう。

「い、いえ。状況が状況です、誰だって居ても立っても居られなくなる」

「………そう仰つてくださるのは有り難く存じますが、実際ご無礼を働いてしまいましたので」

そう言いながら凄まじい勢いでミラを掴んでいた男の腹に回し蹴りを叩き込む。

吹いた風には柔らかく優しい匂いが混じっていたが、行われた行為は暴力そのもの。呻いて倒れる男を一瞥した後、周りの男達を睨めつける。

ミラは咄嗟に構えを取りそうになつてしまった。

「良いですか。法は犯しても人道を違えないでください、本来ならわたくしが頭を下げて済む問題ではありません。暴力は結構、ただし理性の元に振るいなさい」

「それが出来ないならば今すぐ撃ち殺します。良いですね」

誰も答えない。

それを良いことに改めて、等と言いながら少女が振り向いて一際丁寧な礼を見せた。

「お見苦しいところを。わたくしはMauser Karabine r 98 kurz、I. O. P製の元グリフィン所属の人形です」
「今はカラビーナとだけ名乗って非合法組織“Hundert”の代表をさせていただいております。是非とも、ミラ・リンクス様に知的援助が出来れば望ましく思いますわ」

知識じゃなくて暴力的援助の方が頼りになりそうだ。

ミラの正直な感想はそれに尽きた。